



「ゆるぎない絆」が奇跡を生む

～ 元和光中教員「長尾 健司先生(現高商野球部監督)」に学ぶ ～

一昨日の生徒総会で、かつて和光中で勤務された長尾健司先生が講演会でお話しされたことを一部お伝えしました。ここで少し付け加えます。

中学校の体育教師から名門高松商業高校の野球部監督となった長尾先生が、甲子園で活躍するチームをつくりあげるまでの道のりは、決して平坦なものではありませんでした。



(長尾監督と浅野選手：ドラフト1位指名の喜び)

高商での練習初日、「部員全員で野球をやろう！」と言った長尾監督に、3年生から返ってきた言葉は、「僕たちが1年生の時は、全く野球をさせてもらえませんでした。その苦しい時期が終わってやっと野球ができるようになったんで、準備やグラウンド整備、雑用は全部1年がやるのが当然だと思います。」だった。「野球がしたいのをずっと我慢した皆の気持ちはよく分かる。明日からグラウンド整備も水抜き（雨が降った後の水をスポンジに吸わせて取り除く作業）もオレがやる。皆はしなくていい。」そう言って長尾先生は、翌日、夜明けと共にグラウンドに現れ黙々とグラウンド整備をしました。その後ろ姿を見て、ある2年生が「オレもやります。」と言って一緒に汗を流すようになりました。当然のことながらそう簡単にチームが変わることはありません。でも、日々の積み重ねが、体育会系組織にありがちな「上級生」＝「下級生の時間や労力を『奪う側』」「下級生」＝『奪われる側』という構図を徐々に変えていき、ついには、「共に雑用をこなし、野球の技術を惜しみなく後輩に教える上級生」＝『与える側』、「下級生」＝「技術やさまざまな教を『授かる側』」という新しい横のつながりができました。そして、グラウンド整備や地域のボランティア活動に率先して取り組み、汗を流す先輩達に後輩達は尊敬や憧れの気持ちを抱くようになります。こうしてできた「ゆるぎない絆」こそが、数々の『高商の奇跡』を生んだのです。ちなみに当時の1年生が、後に甲子園春のセンバツで準優勝を果たしたチームの主力メンバーです。大会出場32校のうち一般枠で参加した公立高校はわずか5校。なかでも高松商業高校のメンバーは全員地元香川県出身でした。

高商野球部では、公式試合直前まで出場選手を決めません。「レギュラーを決めて強化する方が効率が良いのでは」の質問に、長尾監督は、「それよりも大切なことがある。自分にもチャンスがあると考えerことで意欲が高まる。競い合い、高め合う練習環境が個々の能力を引き出し、結果的にチーム力を高めることにつながる。競争意識がいい方向に働き、本来ポジション争いをする者同士がアドバイスをし合う姿も見られるようになった。上級生、下級生の壁がなく、自分を磨くと同時に相手を認め、共に成長している。」と答えました。このような支持的風土の中で『自走する集団（自分たちで考えて、一人一人が役割を果たし前進する集団）』が作られていったのです。

昨年10月、浅野翔吾選手がドラフト会議で1位指名を受け、読売ジャイアンツに入団しました。予想を上回る1位での指名となった理由をプロ野球の専門家達は次のように説明しました。「ずば抜けた身体能力と長打力。それと何より終始チームを盛り上げ、声を出して引っ張ってきた『抜群の人柄』。上手い下手ではなくチームの中でどんな役割を果たせる人間なのか、『人間性＝選手の伸びしろ：成長の可能性』。」と。



6月26日、「2023 縦割りチーム」のメンバーを発表します。浅野選手は甲子園最後の試合（準々決勝：対近江高戦）を終えたとき「みんな成長してくれた。いいチームになった。」と語り、大きな拍手に包まれ球場を去りました。我々がチーム和光も共に成長を喜び合えるよう頑張っていきましょう！